

「えっ……私。その……」

香穂子が戸惑っていると、吉羅の携帯が鳴った。

「部屋に食事を運ぶのをいつにすればいいか訊かれたんだが。まずは早速温泉に入って、汗を流してからにしようかと思うんだが、君はどうだね？」

「は、はい。私もそうしたいです」

「この部屋の奥、あそこに露天風呂への入り口がある。……この部屋からしか入れない、部屋つきの露天なんだよ」

香穂子の心臓が跳ねるように高鳴り始める。

体を洗い、露天風呂にそろそろと足から入ると、あまりの心地よさに

「ああ～～……」と感嘆の声が出た。

緑溢れる自然豊かな山あいの奥で……隠れ湯的な存在の場所に招待された。

これはもう、今夜が勝負だと思う。

逆に言えば、こんな絶好の機会で抱かれないのなら、自分には魅力がないととことんまで落ち込む羽目になりそうだ。

あとで絶対、彼が入ったら覗いてやるんだから。

そんな計略を胸に抱いて、香穂子は快いお湯から上がった。

「……さっきの続き……してくれませんか？」

彼の返事を待たず、頬に香穂子の方から唇を当てた。

「それがどういう意味か、君はわかっているんだろうね？」

怒っても呆れてもいない、穏やかなトーンだ。

「わかっています。……私、もう高校を卒業しました。来月から大学生です。

もう子供じゃないつもりです。だから……」

浴衣の襟首に手を滑らせ、香穂子は布の中の素肌に触れた。

彼の肩口付近の肌を撫でてしていると、吉羅がキスをしてきた。

「……脱げということかな？」

察しのいい彼は香穂子の仕草で彼女の望みを汲み取った。

うなずく香穂子から離れ、膝立ちで起き上がると、彼は陽に焼けた裸身を晒した。

彫像のように無駄のない、引き締まった身体をしている。

スポーツジムに通って鍛えているだけあって、ナチュラルに筋肉質な体つきだ。

「……好きなんです。苦しいくらい。もうだめなの、私。……好きすぎて
……おかしくなりそうで……」

香穂子の方から吉羅に抱きついた。

勇気を振り絞り、情熱のありったけをぶつけてしまった。

吉羅にキスしようとする、彼の方から抱きしめてきた。